

◎ 電力市場に対する規制論の前提

- ・ 電源構成をどのように想定するか。
- ・ ネットワーク制約の程度
- ・ 競争・投資環境

1. アデカシー確保

- 発送電分離を行い競争促進を促す体系へ変更するのであれば、予備力を含めた供給力確保(アデカシー:供給力の十分性)が課題。
 - 電源開発が計画から市場原理に移行するため、補完措置が必要ではないか。(欧米諸国の場合には広域的に他国・地域へ依存することが可能)
 - 短期の需給運用における予備力をいかに確保するか。(同じ発電所から経済運用・予備力両方の電気が生み出される。)
- ← 短期のアンシラリー・サービスは、供給力確保を含む制度設計に伴う付随的な問題

2. 卸電力市場の構築

- 卸電力市場で十分な競争性を確保するには、多様なプレーヤーと十分な競争用電源、適切な市場監視が必要。
 - 環境規制から火力発電所の建設が困難化している中で、競争用電源をいかに確保するか。PPSで競争用電源の開発を行ったのはエネット程度。
 - 少なくとも短中期的に供給力不足が懸念される中では、卸電力価格は高騰しやすくなるのではないか。

3. 発送電分離の程度

- 発送電分離は財産権の問題に関係するため必要最小限の措置とすべき。
 - 発送電分離と言っても国・地域により多様。特に米国では送電部門の機能を複数の事業者が担うことが多いため、機能を限定した送電部門の機能分離が選択されている。
 - 再生可能エネルギー発電の導入拡大との関係では、接続検討・電源線費用負担の公平性・中立性が課題であり、送電系統運用機能の分離は過大な措置。

★ 再生可能エネルギー発電のような規制市場の拡大と電力自由化は理論上、両立可能であるが、適切な市場価格形成の面で制度設計が複雑化する点に留意。

- 規制市場と自由化市場の両者を含めた需給バランスを維持する市場価格をどの時点で提供すべきかは今後の課題。(どの時点かは、一日前市場価格、当日市場価格、時間前市場価格など様々な種類が考えられ得る。)

以上